

■ そろそろドル/円の戻りも一服？

前回の本欄更新から1週間が経過する間に、トランプ米大統領は新型コロナウイルスの検査において陽性の判定を受け、同感染症の治療を行うため首都ワシントン近郊のウォルター・リード陸軍病院に入院し、そして既に退院した。

その間、米株式相場はトランプ氏の言動やツイートの内容に揺すぶられ放題で乱高下。とはいえ、昨日(7日)あたりの市場の受け止めは「遅かれ早かれ何らかの経済対策が実施されることに違いはなく、それは米大統領選の結果を問わない」といった感じになっており、ともかくにも全体のムードは楽観的である。

結果として、米10年債利回りが一時的にも0.7950%台にまで上昇するなど、基本的に強含みの展開となっていることは特筆すべきであろう。全体にリスク選好ムードが漂うなか、円売りとドル売りが同時に強まる場面があったとしても、そのときの米債利回りが上昇傾向であれば最終的に円売りがドル売りに回ることとなり、ドル/円は強含みとなる。

下図においても確認できるように、足下のドル/円は21日移動平均線(21日線)をクリア



に上抜け、目先は一目均衡表の日足「雲」上限や89日移動平均線(89日線)が意識されやすい状況にある。

これらの節目水準での上値抵抗は相当に強いものがあると見られ、そろそろ戻り一服となる可能性も大いにある。しかし、仮に上抜けた場合にはチャート・フェイスから受ける

印象も一変する。相前後して日足の遅行線が日々線を明確に上抜けるような展開となれば、あらためて107円処を試す動きとなってもおかしくはないと思われる。

むろん、米国の実質金利がマイナス0.90-1.00%あたりで推移しているうちは、自ずと上値余地も限定的になりやすい。強い抵抗に跳ね返されるような格好となった場合には、またレンジ内での値動きに戻って行くものと割り切ったうえで戦略を練るよりないだろう。

他方、このところ少々気に掛かるのは欧州中央銀行(ECB)のラガルド総裁が、これまで以上にハト派寄りに傾きつつあるとの感が否めないことである。同氏は、ここにきて「米連邦準備理事会(FRB)のようにインフレ率が一時的に目標を上回ることを容認する戦略は検討に値する」との考えを繰り返し表明し、「場合に応じてマイナス金利の深堀や追加緩和を実施する準備はできている」とも述べている。

ECB内で意見が分かれているとの指摘もあり、その片鱗を垣間見ることもある。それだけに、ユーロに対する過度な期待は極力控えたいと常に筆者は考えてしまう。市場では、ユーロ/ドルに対する強気の見方も依然として残っているようであるが、再度1.1600ドル処を試し、結果的に日足「雲」を明確に下抜けるような展開となれば、次は中期的に1.1400ドル処を意識せざるを得なくなると見る。

あのトランプ氏のことである。今回の米大統領選でも空前絶後の大混乱を一時的にも巻き起こす可能性が高いと見ておかざるを得ないだろう。その場合、市場で極度にリスク回避のムードが強まって、皮肉にも過度にドル買い圧力が強まる可能性もないではない。用心しておくに越したことはないだろう。

(10月08日 10:40)